

小学校英語教育における教材用英語絵本選定基準の試案 ——絵本リスト作成に向けて——

松本由美

キーワード：英語絵本の読み聞かせ、第二言語習得におけるインプット条件、絵本の選定基準

1 はじめに：小学校英語への絵本の導入の経緯

2016年12月21日に中央教育審議会（以下、中教審と記す）から答申が出され、次期学習指導要領に向けての方針が固まった。そこでは2020年の小学校英語の教科化についても方針が打ち出され、小学校5、6年生では、教科として年間70単位時間、週に2回の読み書きを含めた英語科の授業が行われることになった。また、小学校3、4年生においては、現在は5、6年生で行われている年間35単位時間、週に1回の英語活動が必修として実施されることになった。この英語活動については、現在行われている5、6年生とは異なる発達段階であることを考慮しなければならない。中教審の「論点整理」（2015年8月26日）においても「中学年からは外国語学習への動機づけを高めるため、「聞く」「話す」を中心とした外国語活動を通じて、言語や文化への理解や、音声などへの慣れ、親しみなどを発達段階に適した形で養うとともに、教材の工夫、他教科などで児童が学習したことを活用することにより、指導の効果を高めることが必要」（一部抜粋、傍線筆者）と述べられ、英語絵本の読み聞かせを英語活動に導入されることが検討され始め、絵本教材に関しては、文部科学省において開発されたものが、現在2016年4月から1年間の予定で研究開発校にて試行中である。

文部科学省があげる絵本の読み聞かせのメリットは以下の通りである：

- ①コミュニケーションは、「話す」ことというより、相手の話を「聞く」ことから始まる。聞いて相手の話していることがわかる体験をたくさん児童にさせることが大切である。そこで、児童に聞かせる工夫の1つとして、絵本の読み聞かせが考えられる。
- ②絵本の絵から情報を読み取り、状況を理解しながら、児童は相手の話を聞くことになるため、「聞いてわかる」体験をさせやすい。

③また、選ぶ絵本の内容によって、現実には起こり得ないことを絵本の世界で体験することもできる。

④さらに、昔話の中には、生きていく知恵や教訓的なことが組み込まれている場合もある。

⑤このようなことを踏まえ、外国語活動でも、外国語による絵本の読み聞かせを行うことが考えられる。絵本を題材に、グループでオリジナル絵本を作ったり、物語を劇やペープサートを使って演じてみたりさせることで、絵本の内容をより理解することにつながる

（下線は原文のまま、段落変え数字の付与は本稿筆者による。）

これらの、絵本の読み聞かせを授業に取り入れるメリットとしては研究開発校での試行の結果を待たなければならないが、概ね異論のないところではあろう。

ところで、文部科学省において開発された絵本は、どのような絵本なのであろうか？ 絵本の読み聞かせが成功するためには、後述するような絵本の読み書かせの技術が1割から2割、残り8割から9割は絵本が重要な役割を果たすといわれている。そこで本稿では、英語絵本を授業に使用する際の絵本の選定基準を試作してみたい。現在、授業に限らず、また英語に限らなくても読み聞かせに良い絵本の系統だった選定基準が無く、現場の教員からも授業で使える読み聞かせにふさわしい絵本のリストを求められることが多いが、基準さえあれば、誰でも自由身選ぶことができ取り上げられ絵本の数も増えるのではないかと考える。

本稿の構成は次のとおりである。2章では文部科学省が教材としての絵本に何を求めているのかを知るために、現在研究授業が行われている絵本の内容を紹介したい。3章では、第二言語習得理論にも合致した新たな基準作りに取り組みたい。4章では、3章の基準を検証するために、現在小学校の英語活動でよく使われている英

語絵本をいくつか選定基準に照らし合わせて評価してみたい。本稿は、本格的な選定基準を作ることを目指した試案であることを最後に申し添える。

2 文部科学省による中学年を対象とした絵本教材

2.1 In the Autumn Forest

小学校中学年のうち3年生用には“*In the Autumn Forest*”という絵本が開発されている。この教材に関しては、教室で使用する大型の絵本と、各児童が使う小型の絵本、そして音声CDが用意されている。内容は文部科学省による「中学年を対象とした絵本に関する基本的な考え方」によると次のとおりである：

この絵本では、秋の森の中で動物たちがかくれんぼをして遊んでいる場面を扱っています。オニの犬(dog)は、森の中で隠れている動物の体の一部を見て、*I see something …*と言います。そして、何の動物かを推測して、*Are you a …?*と言いながら、動物を次々に見つけていきます。見つかった動物は、それぞれの特徴を踏まえた話し方(イントネーション、リズム、ピッチ)で、見つかってしまった自身の体の部位言い、自身を紹介しています⁽³⁾。

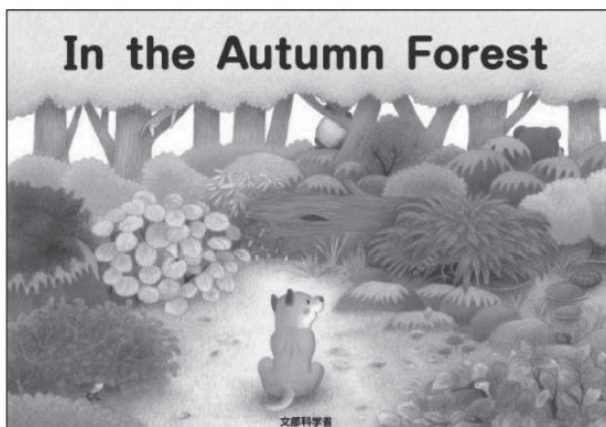


図1 第3学年用絵本“*In the Autumn Forest*”表紙

文部科学省によると、この絵本の中で注意したことの一つとしては、場面の繰り返しを利用して、語彙や表現にふんだんに触れさせ、読み聞かせ手とともに発話するようになることを目指すとある。また推測を促す物語を織り込み、児童が自分の推測があっているかどうか確かめるために自主的に本を読み進めていくことを目指すと

のことである。そのために、かくれんぼという子どもたちにとってなじみが深く、推測を含んだ遊びがつかわれているのであろう。

また主人公は動物であるが、かくれんぼをする動物の名前とともに、例えば「長い耳が見えている➡ウサギ」などの推測を使いながら、隠れている動物と共にその特徴的な体の部位を挙げて、体の部位を覚えさせることを試みている。また、最終ページには図2に示したように、森の木の真ん中に児童が自分の顔を描いたり、写真を貼ったり様々に活用できるスペースが用意されている。これは、後述のように物語や学習内容そのものを自己に結びつけるという大切な働きをしている。

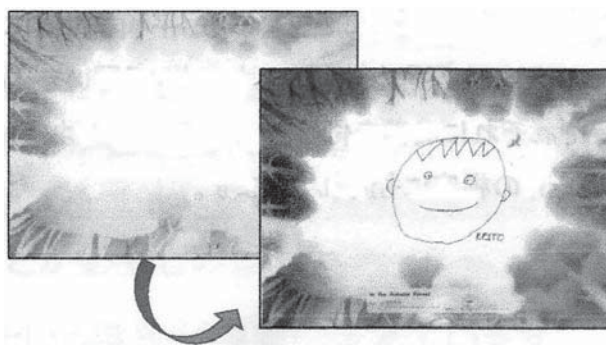


図2 “*In the Autumn Forest*”最終ページ

2.2 *In the Autumn Forest*からわかる絵本に求められるもの

これらのことからわかる、文部科学省が絵本に求めている基準としては、五点あげることができよう：

- ①繰り返し構造
- ②推測を促す構造
- ③動物の多用
- ④読者に馴染み深い状況設定
- ⑤児童自身に結びつけることができる

2.2.1 繰り返し構造

絵本に限らず、物語構造としては一般的なものであるが、繰り返しと変化のバランスが人間を楽しませ、活性化するので、授業に用いる絵本にも繰り返し構造が内包されていることが望ましいであろう。繰り返しのレベルは、*In the Autumn Forest*繰り返しの起こるレベルは、物語構造、文構造、語彙、音素、などが考えられるが、文部科学省の解説にも「場面が繰り返される中で語彙や表現に触れることで、状況からその言葉の意味を推測」⁽⁴⁾

とあるように、繰り返しレベルが2層に渡っていれば（この場合は、物語レベル、即ち場面の繰り返しと、語彙レベル）語彙が分からなくても、繰り返しなのだからこうだろうという予測がつく。推測することは第二言語習得においても重要な働きであるから、絵本という絵の助けがあり、物語構造が分かりやすいことを利用し場面を繰り返して、語彙の方は推測させるのは、第二言語習得の知見にも合致している。

2.2.2 推測を促す構造

上記で述べた語彙の推測も重要であるが、物語の展開や、絵本の絵の変化などを推測させるのは、この発達段階の児童にはとても重要である。この年齢の児童が推測をしたのち、自分の推測があっているかどうか確認行動をするということも、発達心理学の知見からも明らかになっているのであり、こうした予測と確認行動を外国語活動に応用することは、まことに望ましいと言える。

しかも絵本の場合は、絵で確認できるので推測があっているかどうかを児童が自身で確認しやすい。こうした意味でも小学校3年生に絵本を使って、言語情報が増えると予測できる英語活動に絵本を導入することは望ましいと言えよう。

2.2.3 動物の多用

物語論及び絵本論の領域になるので、詳しくは言及しないが、中学年でもより年齢の低い3年生用の教材において、動物を主人公に設定していることは特筆に値するであろう。児童用の絵本を手にとると、動物が主人公であったり、脇役であったり、あるいは、主人公の大切にしているぬいぐるみであったり、何らかの形で動物が登場することが多いのには、誰もすぐ気づけるだろう。世界的に人気の高い、ディックブルーナーのミッフィーや、日本の児童に絶大な人気の「ぐりとぐら」のシリーズなどは典型的な動物物語である。⁽¹⁾

2.2.4 読者に馴染み深い状況設定

本節で述べる馴染み深い状況設定とは、どの児童が一度は経験しているであろうかくれんぼのことを指している。教材はその目的からして新規学習事項を含んでいるので、児童をある意味不安にさせるものである。その負担を軽減する方法としては前述の繰り返し構造を取り入れることと、この馴染み深い状況設定を取り入れる方法がある。児童が良く知っていることを取り入れるのは、児童を安心させるだけではなく、積極的に活動に取り組

ませるためにも、教材に取り入れなければならない観点である。

こうした観点から、最後に述べるように、児童が幼少期親しんだであろう、日本の物語の翻訳絵本を取り入れていくことも効果的である。

2.2.5 児童自身に結びつけることができる

絵本の最終ページに設けられた児童の顔を描いたり、写真を貼ったりするスペースは、絵本に登場する“Are you ~?”に対応して、“I am ~.”と答えるためにも設けられているが、自己認識を育てることとともに、絵本のこのページを使い、絵本の物語あるいは授業で学習した内容と児童自身を結びつけておくことは重要な過程である。このために、絵本を取り入れることは効果的だと考えられる。

2.3 Good Morning

次に、小学校中学年のうち4年生用に開発された“Good Morning”という絵本を同じく「中学年を対象とした絵本に関する基本的な考え方」から紹介したい：

この絵本は、ブラジルに住む友達に自分の一日の生活を紹介するという設定で、和（かず）という名の男の子が、朝起きて、夜寝るまでのある一日の生活を扱っています。この話に加えて、サブストーリーも展開されています。朝、目覚めた男の子の背景にあるカレンダーには、猫が四匹います。しかし、絵本をよく見ていくと、猫が一匹カレンダーから飛び出し、男の子の後を追いかけて学校へ行ったり、公園で遊んだりしています。⁽⁵⁾

まず、物語の設定が国際理解を目指したものになっていることは特筆すべきである。また、時間という註所的な概念もこの学年では取り入れたいところである。また、主人公の和だけではなく、サイドストーリー（副物語）も絵本ではしばしば取り入れられる手法であるが、3年生より注意力や集中力が増しているこの学年には、新たな発見を促す工夫になっている。また、主人公の和は、平和（たいら かず）という名前であり、飼い犬はピースである。「誰もが生まれてきたことを喜べる、平和な世界になってほしい、平和な世界にしたいという願いを込めて、それぞれに名前を付けました。この願いは、「Hi, friends!」の根底にも流れています。」とあるとおり、平和教育もこの時期の外国語教育の中で行いたいものだ⁽⁶⁾

が、小学校中学年という年齢を考慮すれば、絵本は目的にかなった教材だと考えられる。



図3 第4学年用絵本“Good Morning”表紙

2.4 Good Morningからわかる絵本に求められるもの

ここでは、前節第3学年用絵本と重複していることは割愛し、特に発達段階が少し進んだ学年に目を向けて、絵本に求められるものを考察していきたい。このことは後に述べる絵本選定基準において、小学校5、6年生に向けた絵本を選定する際の基準作りを考慮するにあたり重要だと考えられる。第4学年用絵本“Good Morning”から文部科学省が絵本に求めている基準としては、三点あげることができよう：

- ①国際理解の視点
- ②複眼的視点
- ③平和教育の視点

2.4.1 国際理解の視点

そもそも現行の外国語活動でも国際理解教育としての役割が求められているが、次期学習指導要領に向けて、2016年12月に出された中教審答申では、以下のような外国語活動の見方が求められている。

③外国語活動、外国語科における「見方・考え方」

- 他者とコミュニケーションを行う力を育成する観点から、社会や世界との関わりの中で、外国語やその背景にある文化の多様性を尊重し、外国語を聞いたり読んだりすることを通じて様々な事象等を捉え、情報や自分の考えなどを外国語で話した

り書いたりして表現し伝え合うなどの一連の学習過程を経て、子供たちの発達段階に応じた「見方・考え方」が豊かで確かなものになることを重視し、整理することが重要である。⁽⁷⁾（下線は原文通り）

絵本はその特性から画像があり、自国の物とは異なる習慣や風物を理解させやすい。また、児童が理解しやすい絵本というメディアを使って、この発達段階で自国と異なる文化や、多様な価値観に触れさせることは非常に重要なことである。

2.4.2 複眼的視点

物事を多面的に見ることを教えることも、第4学年では教えたいが、先に取り上げた絵本の中のサイドストーリーの存在は、このためにも有効である。実はこの副物語の手法は、言語を問わず絵本の中では良く用いられ、物語展開の手法である。テキストでは語られない事物が絵の中では何らかの動きをしていて、ある種の物語を展開するものであるが、子どもは大人より言語能力がまだ低い分、絵に集中して、サイドストーリー^[2]の発見も子どもの手によってなされることが多い。

2.4.3 平和教育の視点

平和教育の重要性については、ここで取り上げる必要はないと思われるが、絵本を使って平和の大切さを教えることについて言及しておきたい。国際理解と同様に多様な価値観を理解することで海外の文化やそこに登場する人、事物に親しみをもつことができるが、この時期にこそ外見や価値観の違う人、物と出会うことが、平和教育には欠かせない。そうした知っている人や物がある国や地域を攻撃したりすることは難しいからである。絵本大国である日本では、海外の絵本を取り入れなくても、十分な読書活動をすることができるが、だからこそ、海外の絵本を取り入れ、多様な価値観を受容することは重要なのである。

これまで、文部科学省により製作された小学校中学年の絵本をについて、その重視している観点を述べてきた。絵本選定の基準を策定するためには、物語構造や取り上げるべきテーマのみならず、まず学習目標の一つである、英語に関しても何らかの検討を加えなければならないであろう。次章ではこのことを踏まえて、第二言語習得理論のインプット条件から、絵本選定の際に重視されるべき観点を探してみたい。

3 第二言語習得理論からみる絵本選定の基準

3.1 第二言語習得理論：インプット－インタラクシオン理論

第二言語習得を促す教授法の背景理論の一つにインプット－インタラクシオン理論というものがある。そもそも Krashen (1985) が「インプット理論」で提唱した通り、「インプット理論」とは赤ん坊が母語を習得するときの⁽⁸⁾ように、第二言語習得においてもインプットが重要である。」ことは誰しも異論がないであろうが、これでは、たたいしい言語習得がされているのかどうか確認できないことなどからアウトプットを重視する、インプットアウトプット理論^[3]を経て、Long (1996) に始まるインプット－インタラクシオン理論に至る。即ち、アウトプットの産出だけでなく、その産出過程で展開される繰返しや修正などの学習者と指導者の相互交流こそが、第二言語習得に重要な役割を果たす⁽⁹⁾というものである。

また、英語活動における英語絵本の読み聞かせは、インプット－インタラクシオン理論の観点からは、その読み聞かせ手の発話を、児童に対してのインプット、読み聞かせている最中の児童とのやり取りや、その後の児童の発話を引出す質疑とそれに対する児童の応答がインタラクシオンに当たると考える。児童の発話はアウトプットと考えられるが、それに何らかの形で呼応し児童の発話を拾わなければならないので、そこに必ずインタラクシオンという、相互のやり取りが生じることになる。

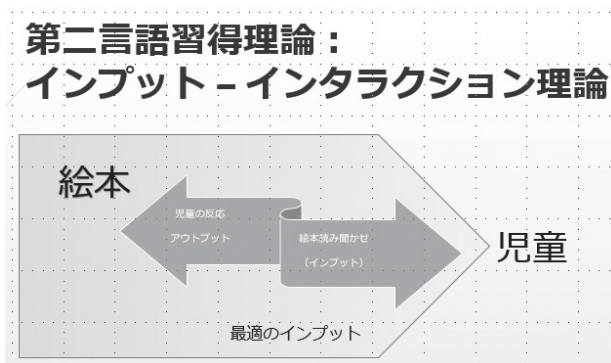


図4 インプット－インタラクシオン理論から観る絵本の読み聞かせ

この相互作用は上記のように示される。

ところで、絵本の読み聞かせにおいては、絵本を適切に選ぶことが重要であることは既に述べたが、第二言語習得の観点からも、適正なインプットを入力することが

重要だとされているので、次項で Krashen が初期理論であげたインプット条件と村野井が教室言語習得の観点から修正したインプット条件、最後に本稿では、絵本の読み聞かせを念頭において、インプット条件を付加したい。

3.2 インプットの適正条件

Krashen は「インプット理論」の中で、「i (input) + 1」という適正条件を主張している。即ち、少しの助けがあれば理解できるという「理解可能性」である。既に理解しているインプットを与えても、新たなことが覚えられるわけではないので、当然言語習得が促進されることは無いし、逆に全く理解できないインプットを与えても、一切理解されず、意味解釈過程が生じないので習得を促進しない。つまり、少しのヒントや手助けがあれば、推測して意味を理解しようとする意味解釈過程が作動するというわけである。

これに加えて、村野井 (2006) は教室言語習得の観点から、として、「関連性」「真正性」「音声と文字のインプットであること」の3つのインプットの適正条件を付け加えている。

「関連性」とは、村野井 (2006) によると「インプットの内容が自分 (= 学習者) の生活、将来、興味、関心に関連があるかという点である。⁽¹⁰⁾」学習者の興味や関心にあっていれば、自ら知りたい情報を得ようとし、能動的に学習も継続するし、背景知識があれば言語処理も進みやすい。児童が興味を持てるような、学齢にあった絵本が重要になってくると考えられる。

次に、取り上げられているのが真正性である。これは本物であることになるので、本来はその言語圏で出版された絵本が望ましいであろう。しかし、翻訳絵本も、先に述べた国際理解教育や平和教育の観点から、欠かすことができない。

次に、「音声と文字のインプットであること」という条件をあげているが、村野井 (2006) が想定しているのが中学生であることを加味しなければならない。即ち種類の異なる刺激を持ち、受容するときに複数の感覚を使う方が、言語習得が進むという多重理論の考え方である。

この条件を小学校3、4年生の英語活動で行う絵本の読み聞かせを想定して改案し、絵と音声を持つことをインプット条件として追加提案したい。音声とはすなわち、読み聞かせにおける肉声である。教育現場ではやむを得ずCDを使用することも認めなければならないと思うが、やはり肉声に勝るものはないことだけは申し述べたい。

この改定案を含めた本項でこれまで述べてきた、第二言語習得における適正インプット条件をまとめると次のとおりである。

- ①理解可能性……少しの助けがあれば理解できる
- ②関連性……学習者の興味に則している
- ③真正性……本物であること
- ④音と絵があること……多くの感覚を使うこと

次章では、これまで上げてきたすべての条件を加味しながら、英語絵本の選定基準を打ち立てていく。

4 英語絵本の選定条件（試案）

本章では、これまで上げてきた文部科学省が英語活動において求めている絵本の条件と第二言語習得におけるインプットとしての絵本に求められる条件を加味し、小学校3、4年生に読み聞かせに使える絵本の選定条件を考えていきたい。

①絵本の長さ

読み聞かせにかけられる時間的長さは、あくまで経験則ではあるが、小学校3、4年生の場合は6分から8分が適切であると考えられる。授業案の組み立ての観点からも、一回あたりをこの時間内で設定する方が児童の集中力を保持できる。

絵本のページ数でいうと16見開き程度（32ページ）までで考えたい。ただ、次の条件である英語の平易さにも大きく左右されるので、テキスト（文章）部分の平易さと長さも見て決めてほしい。また、クラスの現状や授業の進行状況なども加味しつつ、一度の授業で読み終得ることにこだわる必要も無く、次の授業に繰り越すシリーズ読みも取り入れて、弾力的に対応したい。

②英語が平易であること

インプット条件の理解可能性を考えなければならない。絵本の難易度については、条件①の長さ、この②の平易さを組み合わせたものとして、DRA（Developmental Reading Assessment）[®]やLexile[®] levelsの他に、出版社が独自に設けているScholastic Guided Reading Levelなどがあるが、語彙数の他に文構造の複雑さやテーマの難しさを考えれば、語彙数が少なければ平易であるとは言いがたい。そこで、本稿では平易な英語を中学生が小学生に読み聞かせられる程度としておきたい。この意味でも小学

校の教員は、中学校英語の教科書は少なくとも見ておく必要がある。

③英語に特徴的な音声やリズムであること

これは第二言語習得のインプット条件の真正性に基づくものである。公教育で受ける英語教育の初年度である小学校3年生においては初めて正式に学ぶ音声であるから、真正性は非常に重要である。また、英語であればよいのではなく格調高い英語を身に付けられるように、語彙選択や押韻により美しい文体であれば、理想的である。

次期学習指導要領に向けたと答申では、「標準的な英語音声に接し、正確な発音⁽¹¹⁾を習得する」ことの必要性が述べられている。

英語には昔話やマザーグースなどことば遊びの絵本も多い。これらは文化を知るうえでの価値もあるので音遊びの絵本なども、有効に用いたい。“Each Peach Pear Plum”などは、英語圏でも教育用に用いられており定評がある。絵本も英語の特徴を楽しむことに特化した絵本も用いたい。

④絵本作品として優れていること

コルデコット賞受賞作や、国際アンデルセン賞などの権威ある賞を受賞している作品は、ぜひ取り入れたい。

まず真正性の観点から選定基準に入れるべきであるし、知っている作品を原作で読めるという児童の動機を高めることにもつながる。例えば「かいじゅうたちのいるところ」などは、日本語に翻訳されて既に名高いので、知っている児童が多いと思われるが、英語も平易でありながら、美しさを持っている。知っている絵本を英語で読むことができれば、児童の英語学習への動機も高まると思われる。

⑤遊びの要素があること

インプット条件の関連性にも関わるが、児童の興味を惹くためには、まず楽しくなければならない。文部科学省の作成教材の“In the Autumn Forest”のところでも述べたが、子どもの知っている遊びを取り入れることや、絵本そのものに遊びの要素を持たせることは、重要な観点である。

遊びを物語にしている“In the Autumn Forest”の場合は、かくれんぼをしながら動物たちを登場させて、児童を楽しませている。

また絵本の形状そのものが遊べるおもちゃのようにすることも可能である。やはり子どもたちに人気の「はら

「ぺこあおむし」は絵本の形状の中に遊びの要素を取り入れて展開している。あおむしが食べた果物が増えるほどページの長さが伸びて視覚的にも楽しく、また内容理解を助けてくれる仕組みである。また、あおむしが食べた果物には穴があり、そこに指や紐を通すことにより、あおむしの動きを楽しめるという、仕掛け教育絵本の先駆けとも言われている。英語も平易で美しい。

⑥他教科との融合をしやすいこと

英語は本来それが目的ではなく、手段であるから、英語を使って何かを達成できるのが、本来の姿であろう。中学年で英語学習初年時であることを鑑みれば、複雑なことはできないかもしれないが、色や形を扱った絵本は、視覚情報と併せて言語を習得できるので児童も楽しんで、また図画や理科と関連付けやすいのではないだろうか？「くまさん、くまさん、なにみてるの？」は小学校英語では、既に定番であるが様々な色の動物が登場するので、色の授業に使用するのが容易であるが、巧みな押韻によって美しいリズムが紡ぎ出されていることは、拙稿で指摘した^[4]。

また食べ物が登場する絵本は、児童も馴染み易く、食育のような展開も考えやすい。既にあげた「はらぺこあおむし」はお菓子を食べすぎてお腹が痛くなるという物語なので、食育に使われることも多い。

⑦児童参加がしやすいこと

読み聞かせの最中、もしくは読後に児童が何らかの形で参加しやすいことも重要な条件であろう。2.2節で指摘した「児童自身に結びつけることができる」という条件と関わりがあるが、人間はやはり自分のことに関係なければ興味も持てないし、興味がなければ学習は促進されないのである。また、覚えたことをすぐ自分のことばとして発話するのは何より有効なアウトプットである。

また、児童が参加を促すという意味でも、繰り返し構造を持った絵本は選定条件に適うであろう。場面や語彙が繰り返されることで、児童が自らことばを発しやすくなる。「くまさん、くまさん、なにみてるの」はそうした絵本の代表格である。

また、繰り返しではなくても、動作の表現体の部位を扱ったものは、児童も同じ動きをするなどして楽しめる。「できるかな？—あたまからつまさきまで」は、登場する動物たちが、様々な動きをして、“Can you do it?”と呼び掛けてくるので、それに応じて動き“I can do it.”と答える流れができていて、児童参加を求めやすい。

「きみがどんなにすきだかあててごらん」も同様の効果を持つ物語絵本である。

⑧物語構造が以下のいずれかであること

- ・繰り返し構造
- ・起承転結型（あるいは、「行きて帰りし物語」）

前者は、2.2.1繰り返し構造でも紹介したように、繰り返すことにより児童の理解を助けることができ、理解できない英語が生じた際、内容理解を補うことができると考えられる。また、物語が繰り返し構造になっている場合は、絵やテキストも繰り返し部分を包含するので、文体的リズムが生じる。そのことによって英語特有の音声やリズムが把握しやすくなる。

後者の起承転結型、もしくは絵本学においては「行きて帰りし物語」と呼ばれるもので、何か事件が起きて、最後には解決されてめでたく終わる型の物語である。英語でも、日本語でも物語の典型構造の一つなので、児童の理解がしやすく、やはり言語理解が不足しがちな外国語の授業にはふさわしい。

多くの絵本がこれらのどちらかの構造を持っているが、先に紹介した「くまさん、くまさん、なにみてるの」が繰り返し構造の典型であるし、④絵本作品として優れていること^[4]で紹介した「かいじゅうたちのいるところ」は後者「行きて帰りし物語」の典型である。

⑨テーマをもつこと

特に第4学年以上は、読後活動を展開する意味で何らかの教育的テーマをもっていることが望ましいであろう。文部科学省が“Good Morning”の中で取り上げた国際理解の視点と平和教育の視点は、外国語教育において最も重要なものであると考えられる。絵本を使った教育でこれらの視点を取り入れることの重要性は2.4.3 平和教育の視点で述べた通りである。コルデコット賞受賞作品でもある「ゆきのひ」もこの基準にもふさわしい作品の一つである。

⑩主人公、登場人物の設定が魅力的であること

子ども用絵本では、動物を主人公や、登場人物に取り入れたものが多いことは2.2.3 動物の多用で紹介した。主人公や登場人物が魅力的であれば、児童の興味を惹くことができ、内容理解が進むだけではなく、話している内容を理解したいと思わせ、児童の動機を高めることができる。これには、様々な絵本作品が当てはまるが、同じ主人公を扱ったシリーズものなどは、使用しやすいと

思われる。「だめよ、デービッド」のデービッドシリーズは児童にも人気のある、この基準にも相応しい作品である。

以上10項目あげてきたが、①②③④は英語活動では必ず満たしてほしい項目、⑤⑥⑦は、教育現場において一つは満たしたい項目、⑧⑨⑩は今後絵本を活用するときに長期的に検討していきたい項目である。これらの基準をもとに絵本選定リストを作成していきたいと考える。

5 おわりに

本稿では、文部科学省が2016年4月に研究開発校に配布した、2冊の教材用絵本“*In the Autumn Forest*”（小学校第3学年用）と“*Good Morning*”（小学校第4学年用）を紹介しながら、その中で文部科学省が絵本を通じて教えようとしていることを抽出した。さらに第二言語習得理論のインプット条件を、絵本をインプットにする場合に合わせて改訂して、英語絵本を使った授業用のインプット条件を提案した。

上記を勘案しながら、英語活動のための使用教材としての英語絵本を選定する基準を10項目提案した。基準と共に、使用にふさわしい絵本をいくつか紹介したが、今回は選定基準の理解を助ける目的で、ごく簡単に良く知られているであろうものに限って紹介した。以降リスト作成に向けて随時紹介をしていく予定である。

注

- [1] 『動物絵本をめぐる冒険：動物－人間学のレッスン』(矢野智司著，勁草書房，2002年)などを参照されたい。
- [2] 『はじめてのおつかい』(筒井頼子著，林 明子絵，福音館書店，1977年)における黒猫の動きは、サイドストーリーとして有名である。
- [3] 「インプット-アウトプット理論」では、アウトプットは産出されたものに修正が加えられ、正しい文法に気づくのみならず、言語産出時に脳内で行われるリハーサルが知識の自動化を促進し、またリハーサルが不調なら自身の言語知識の欠如に気づくという有用性があり、やはり第二言語習得にはインプットと共にリハーサルを伴うアウトプットも必要であると結論づけられた。
- [4] 松本 (2015) において音声レベルでは、「[Brown bear]の各単語の語頭の/b/が繰返され耳に馴染みやすい組合せになっている。また、第二場面の「Red bird」は各単語の語尾が/d/になり同様に音声として馴染みやすくなっている。」ことを指摘した。

引用・参考文献

- (1) 文部科学省『教育課程企画特別部会 論点整理』2015年8月26日
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afeldfile/2015/12/11/1361110.pdf
最終アクセス日2017年1月1日
- (2) 文部科学省『Hi, friends! 2指導編』2012年
- (3) 「中学年を対象とした絵本に関する基本的な考え方」
http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/_icsFiles/afeldfile/2016/05/02/1370109_1_1.pdf
最終アクセス日2017年1月1日
- (4) 同上
- (5) 同上
- (6) 同上
- (7) 幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)平成28年12月21日 中央教育審議会
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afeldfile/2016/12/27/1380731_00.pdf
最終アクセス日2017年1月1日
- (8) Krashen, Stephen *The Input Hypothesis: Issues and Implications*, London, Longman
- (9) Long, M.: The role of the linguistic environment in second language acquisition, in Ritchie, W. C. and Bhatia, T. K. (eds.) *Handbook of Second Language Acquisition*, Academic Press, 1996
- (10) 村野井 仁：『第二言語習得研究から見た効果的な英語学習法・指導法』(p.28)大修館書店，2006
- (11) 幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)平成28年12月21日 中央教育審議会
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afeldfile/2016/12/27/1380731_00.pdf
最終アクセス日2017年1月1日
- (12) 松本由美「初期英語教育における絵本の有効活用－児童の自発的反応を引出す「読み聞かせ」の試み－」『玉川大学リベラルアーツ学部研究紀要』第7号2014年

本文中で紹介した絵本

- ・邦題：「かいじゅうたちのいるところ」
原題：“Where the Wild Things Are”
Maurice Sendak.
Red Fox. 2000
- ・邦題：「はらぺこあおむし」
原題：“The Very Hungry Caterpillar”
Eric Carle
Philomel Books; Brdbk. 1994
- ・邦題：「くまさん，くまさん，なにみてるの」
原題：“Brown Bear, Brown Bear, What Do You See?”

- Eric Carle. Henny Hot. 1996
(first published in 1967)
- ・邦題「できるかな？—あたまからつまさきまで」
原題：“From Head to Toe”
Eric Carle. Penguin. 1997
 - ・邦題「きみがどんなにすきだかあててごらん」
原題：“Guess How Much I Love You”
Sam McBratney illustrated by Anita Jeram.
Walker Books. 1994

- ・邦題：「ゆきのひ」
原題：“The Snowy Day”
Ezra Jack Keats
Viking Books for Young Readers. 1962
- ・邦題：「だめよ， デイビッド」
原題：“No, David!”
David Shannon
Scholastic. 1998

(まつもと ゆみ)

On Effectiveness of English Story Books at Japanese Elementary Education of English as a Foreign Language

Matsumoto, Yumi

Abstract

This paper proposes that establishing specific reading of selected English picture books would have immeasurable positive effects on storytelling in English classes in elementary schools, and it would consequently lead to an improvement in the English ability of young children. Basis of selection should be established to help teachers select the English picture books well enough to use picture books in their classes.

Keywords: English Picture books, Storytelling, Input-Interaction Hypothesis, Selection Basis for English Picture books